

24 大内弘世

山口開府の祖、
鮮烈な中央デビュー

1326～1380

官位 従五位上

菩提寺 正寿院（現乗福寺）

墓所 乗福寺（山口市大内御堀）

南北朝の動乱の時代、大内氏の一族は大内重弘の弟長弘一弘直（鷲頭荘を本拠とした鷲頭系）と、重弘の子弘幸一弘世（大内村を本拠とした大内介系）の系統に分かれていました。

足利尊氏が建武政権から離反し鎌倉から入京して以降、大内氏一族の多くは尊氏方に加わり、尊氏が九州へ下向する際、長弘が周防国守護に任じられました（1336年）。幕府内部の争いが表面化すると（観応の擾乱）、中国探題として下った足利直冬は反幕行動を展開、大内氏一族は直冬陣営に属して参戦し、南朝方につきますが、やがて一族内での覇権争いがおこります。

弘直が周防国守護（幕府方）を継いだころ、弘世は鷲頭荘・白坂山（下松市西部）に陣をおき、弘直方に対し攻撃を開始、1354年頃周防国を平定しました。さらに長門国に進出、幕府方守護厚東氏を攻め1358年長門国を平定、防長両国（現在の山口県域）を統一しました。1370年長門国一宮の住吉神社（下関市）造営が告げる関門海峡の制海権掌握は、以後大内氏繁栄の足がかりとなります。実効支配していた周防・長門両国の守護職補任を条件に、1363年幕府方に転じました。幕府体制に加わり、九州出兵を命じられますが豊前国で菊池勢に敗れてしまい、そこから意外な行動に出ます。上洛し、將軍足利義詮に謁見するとともに、幕府の要人から芸能者に至るまで数万貫の銭貨や唐物（舶来品）を贈り、人気を博しました。軍事的に失敗してもそれを補えるだけの財力と、それを活かす才覚をうかがわせませす。

1371年九州探題今川了俊が九州の南朝方制圧のため下向、その支援を期待されますが、出兵した弘世は勝手に帰国したり、幕府からの要請に対して出陣を拒み深入りを避けます。一方で中国地方の近隣へ力を注ぎ、1366年石

大内弘世公之像（香山公園）
昭和55年建立

見国守護となり、さらに安芸国へ勢力拡大を図ります。戦乱継続の見通しのもと、独自に実力を行使する弘世と、九州出兵に応じた息子義弘との溝が深まっていき、義弘とその弟満弘との内戦のさなか弘世は死去しますが、実は満弘を支援した弘世との戦いだったのかもしれませんが。



乗福寺



大内弘世の墓

山口開府と風水

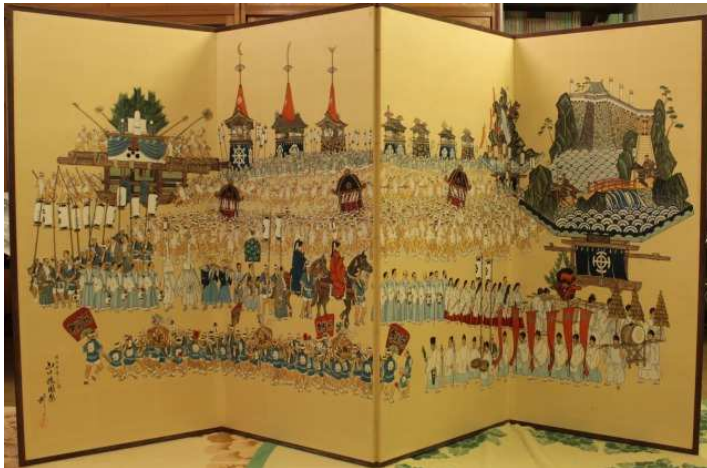
弘世は、大内村から山口の、現在の龍福寺境内周辺に居館を移し、京都を模した町づくりを始めたと伝えられ、近年考古学的にも可能性が認められつつあります。

大内氏館がおかれた山口は、風水にかなった地といわれます。山を背に南が開け、山丘が襟のように、川が帯のように囲み、四神獣（玄武・青龍・朱雀・白虎）によって四方を守られた「四神相応」の地——風水で理想的とされる条件がそろっており、鎌倉と並んで中世の風水の姿が残る数少ない都市といえます。後年、大内氏が陰陽師を京から招いた記録もあり、京都風のまちづくりの一環といえるかもしれません。

八坂神社と山口祇園祭

八坂神社は、弘世が京都・祇園社を山口に勧請したものと伝えられます。豎小路におかれた後、鴻の峰の麓に遷座され、現在の本殿はその時に建造されたものです。いまの地には幕末に移されてきました。

山口祇園祭は1459年に始まったと伝えられ、博多の山笠から6本を山口に移したとの伝承もあります。大内氏壁書では、築山の築地の上から祇園会を見物することが禁じられており、規制が必要となるほど盛んだったようです。毛利氏の時代にも、築山に棧敷を設けて藩主名代や町奉行らが祇園会を見物しました。町々から繰り出された3基の鉾、17の飾山からなる、趣向を凝らした壮観な巡行には、近郷の村々も加勢し、西国の大祭として知られました。



徳見七郎画 山口祇園祭屏風 (山口市歴史民俗資料館蔵)

古熊神社と天神祭

山口・東山の麓に鎮座する古熊神社は、弘世が京都の北野天神から勧請したものと伝えられ、菅原道真を祭神とします。

本殿は檜皮葺で、神社としては珍しい入母屋造りです。拝殿は楼門中央に床を張った、山口独特の楼拝殿造の建物です。臺股は、建築装飾で松竹梅が組み合わされたものとして日本最古のものです。

江戸時代初めに始まったという秋季大祭・山口天神祭は、山口三大祭の一つとして親しまれてきました。江戸時代そのままの御神幸の行列は、参勤交代の舞台となった萩往還筋に歴史絵巻を繰り広げます。



徳見七郎画 山口天神祭屏風 (山口市歴史民俗資料館蔵)

1336	長弘、周防国守護に任じられる
1338	足利尊氏、幕府を開く
1350	観応の擾乱 (~52)
1352	弘世の父弘幸没、仁平寺本堂供養会
1354	この頃弘世、周防国を平定
1358	弘世、周防・長門を平定
1360	この頃弘世、館を大内から山口に移したという
1363	弘世、幕府方に転じ、周防・長門守護となる
1364	弘世、豊前で南朝方に大敗、上洛防府天満宮本殿の再建開始
1366	弘世、石見守護に任じられる
1369	弘世、京都祇園社を勧請したという
1370	住吉神社造営
1371	今川了俊、九州下向
1373	明使趙秩、大内氏の日新軒に滞在 弘世、京都北野天神を勧請
1374	氷上山妙見社上宮上棟
1379	康暦の政変
1380	弘世死去 (55 歳)

人形御殿と大内塗

弘世は京の三条家から姫を迎えますが、都を恋しがったため、京都から大勢の人形師を呼び寄せ屋敷の一室を人形でいっぱいにして姫を喜ばせました。人形御殿と呼ばれるようになり、弘世の愛妻家ぶりを伝えたといえます。このエピソードをもとに大内人形が生まれました。

室町時代から江戸時代にかけて、山口では漆器の生産が盛んに行われてきました。大内氏が朝鮮王朝へ輸出した品物のリストの中に、盆や鞆、椀などの漆製品が含まれていました。江戸時代には後河原を中心に製作され、漆工芸が継承されていたものと思われます。明治に発見された「大内椀」をもとに、大内時代の漆器の復興が目指され、以来工夫を重ねて今に受け継がれています。

